目が覚めたっ!?
プリゲットの世界へようこそっ♪
私は、この世界の愛を司る妖精
「プリア」だよっ

きのこ平原
幻想の森
ボルカノ火山
ゴーストグレイブ
マーメイドビーチ
霧の洞窟
N
W
消えた孤島
深淵の海
メルヘンサイド
ダンニスアイランド
汚染区域
N
W
C
E
深淵の海
アンダーワールド
N
W
C
E
ここに来たって事は、
かなり【愛】に飢えていたんだねっ
…シクシク。
でも大丈夫だよっ!!
ここには【愛】に飢えている
お姫様がいっぱいっ♪

きのこ平原
幻想の森
ボルカノ火山
ゴーストグレイブ
マーメイドビーチ
霧の洞窟
N
W
消えた孤島
深淵の海
ダンニスアイランド
メルヘンサイド
汚染区域
N
W
C
E
深淵の海
アンダーワールド
N
W
C
E
今日はこの世界で生活している
色んなタイプのお姫様を
紹介していくよ☆
お姫様は十人十色❤
君の好みのお姫様を
チェック探してみてね♪

最初に紹介するのは
気まぐれなお姫様達❤
自由気ままで可愛いお姫様に
翻弄されるのもいいものだよね♪

それじゃあ！
お姫様たちとのいろんな現場を
覗いてみよう！
っと、その前に注意してほしいことが
ひとつあるんだ。

女の子と一緒にいる主人公は
みーんな君だよ！
安心してね！
時々性格や性癖が
変わっちゃったりも
するけど気にしないでね！

さて、今度こそ！
君とお姫様達の世界に
れっつごー！

ヒッチハイクの日土あやちゃんを紹介するよ☆

名前：日土あや
ヒッチハイクで旅する普段は真面目な女の子。
ただし乗り合わせた男を
次々と食べる程男癖が悪いビッチ系女子。
やりすぎて事故の原因になったり
車を降ろされたりする為に荒野で1人
ぼつんとしていることが多い。
歳の近い姉がいるようだ。

年齢：18
血液型：A
身長：159
体重：55
スリーサイズ：B91-W62-H86
趣味：ビッチハイク
イラスト：nohito

うだるような暑さの中で車を
走らせていると不意に場違いなモノが
視界に飛び込んできた。
「こんな荒野にヒッチハイクか？」
街から十キロは離れた砂漠の真ん中に
ヒッチハイクの…女の子。
「(絶対ワケありだな…)」
第六感が働いた俺はアクセルを
踏み込み、通り過ぎようとする。
「っ！！」
突然、彼女は道路の前に飛び出す。
ギギギギギギギキキキキキィ！

「あっぶねぇだろ！！」
「酷いじゃないスルーするなんて！
って…あ…」
とっさのブレーキが間に合って
大事には至らなかった…のだが
汗でしっとりと濡れた肌に少し
高揚した表情で彼女はこう言った。
「あなたいい男だねぇーうししっ」

「ねぇいいでしょぉー？」
「うっせ、仕事中なんだよ俺は」
執拗に絡み付いてくる彼女を
必死に押しのける。
「お願い！隣町まで乗せてくれる
だけでいいから！」
「反対方向だって言ってんだろ」
「頻繁に車通るんだから
他のに乗れよ急いでるんだよ」
それでも食い下がる彼女。
「もぉーけちぃーだったらぁー」
不意に胸元をパタパタとあおぎだす。
見せブラの隙間に
ラグビーボールが二つ…。
「ゴクッ」
思わず生唾を飲み込んだのを
彼女は見逃さなかったようだ。
「いいでしょ？」

それでも渋っていた俺の手を
おもむろに掴み…
つぷりと薄い唇の口で咥え
しゃぶり始めた。
「お、おい…」
ピュジュルル！
「うっ！」
柔らかい舌のザラツキが指の腹を
刺激し、ほほの裏肉が全体を
締め上げてくる。
まるで別の生き物のように
激しく絡みつく舌。
ゾゾゾゾと指先から脳髄まで
快感が駆け登る。

並のように登ってくる刺激で意識が
白くそまり判断力が薄れてくる。
「わらひうまいれひょ？」
確かに上手い…
というよりもやヤバイ
これが指じゃなくて股間だったら…。

「乗れよ…」
思わず彼女を車に乗せていた。

車の後部座席に上がりこむなり
彼女は俺の身体に馬乗りになり
押し倒してきた。
有無を言わせず上着を剥ぎ取り
あのラグビーボールみたいな胸を
下着越しに押し当ててくる。
「へぇー乳首ビンビンじゃぁん。
ねぇ期待してたんでしょう？」
「それは…っ」
「あははっワタシの舌技で
興奮しちゃったのぉ?
かっわいぃー！」
ビジュルルルル！
そういうと彼女は俺の乳首に
吸い付いた。

「かぁっ、く、そんな」
「乳首感じるんだね…可愛いよ♪」
「男に…っ可愛いとか、うっ」
くちゅくちゅくちゅ。
何本もの触手が絡みつくような
焦げるような快感が
全身を駆け巡る。
「うふふ、すごぉく敏感なのね♪」

乳首攻めの余韻に浸っていると彼女
は俺のズボンを下着ごと剥ぎ取り、
おもむろにチンコに唾液を
たらし始める。
それと同時に濡れたチンコを
じゅぶじゅぶとゆっくりと
指を絡めるようにしごく。
「うっ…！」
じゅるるるる！
更に唾液を垂らしその量は
チンコを満遍なく
濡らすだけではおさまらず
次第に股間を伝い…
ぬぶぶぶっ
「んぐっ！？」
下腹部に鈍い感触が響き
肛門が焼けるように熱い。

いや待て、肛門!?
「ちょ、おまっ」
「あはは気付くのおっそぉーい！」
「指二本全部入っちゃったよぉ」
ぐいぐいと直腸内を
かき回される感触。
こんなものが気持ちいはずはないと
思っていた矢先に
ビクン!!
「うぐっ、かっはっ…」
「おにーさんの
気持ちいいところめーっけ♪」
ゴリゴリゴリゴリ！
そうか、これが前立腺！
チンコだけじゃなく
身体全体が
押し上げられるような快感。

「あがっ、うっう、うぉ！？」
「ひひひっ、おにーさん獣みたい♪
びくびくしちゃってそんなに
気持ちいいの？」
じゅぶじゅぶじゅぶじゅぶじゅぶ…
前立腺攻めと同時に手こきも
次第にエスカレートしていき…
ペニスが限界を超える
「うっ」
ドビュビュッビュビュビュ〜!
「あははっすごおい！
いっぱい出た！」

びゅっびゅるっ！
「もう、勿体無いよ」
そう言うと彼女は
射精中のちんぽを口で頬張る。
ビクンビクン
ぢゅううぅぢゅうううっ！
尿道に溜まった精液まで
吸いだされる強烈なバキューム。
それが終わったかと思うと
ぐぼっぐぼっぐぼっぐぼっ!
「おひょぁあ!?」
舌を絡め喉奥まで使った
ディープスロートが始まった。

いったばかりのちんぽに
規格外の快感を与えられてのけぞる。
「ちょっ、待ってくれ！
イったばかりで、あっ」
「ふこいれひょ？じゅっぐびゅ…
まひゃいくっ？いくの？」
「うあああああああっ！！」
ぼびゅるるうびゅっびゅるるうう！
「んぶぅうう？？」
一回目よりも大量の精液が
彼女の咥内をさらに汚す。
「凄く濃くて…おひぃい…」
ごくんと吐き出された精液を
飲み干し、こぼれたものも全て
舐めとった彼女はにたりと笑った。

「ふへっ、もう我慢できなく
なっちゃったぁ…」
ちゅぷ…
「入れちゃうね」
彼女はちんこを掴み、
馬乗りになって股間に押し当てる。
「ちょっと待てまだゴムが」
「大丈夫だよ」
ぬぷぷっ
チンコ全体が柔らかい
肉ヒダに包まれていく。
ぐちゅっ、ぐちゅっぐちゅっ
腰を振りマンコ全体で舐めるように
チンコを刺激される。

「口もいいけど…
こっちもいいでしょ？」
あそこからは愛液がつぎつぎと
あふれ出してくる。
ぬぶぶっ
「んうっく、くはぁあああ」
今まで口にした事のない声で
喘ぐ彼女。
「何これすごすぎぃ♪
カリでおマンコめくれちゃうよぉ」
俺を散々弄んだ小悪魔がただの
雌ガキに堕ちた瞬間だった。

「…暴れんなよ！」
「えっ、何！？ちょっと待て！？」
馬乗りになった少女を押し倒し
足を抱え込む。
「散々弄んでくれたお返しだ！」
「おかえし！？」
ぐぶっぐぶっぐぶっ！！！
「きたあぁあああ、らめえええええ！」
「どうした！責めるのは好きでも
逆は苦手か？マンコどろどろに
濡らしやがってこのエロガキめ！」

「ひっ、ぐっ、あああっ
ごめんなさぁあい！！
ひぁあっ、お願い、もっと、
やさしっあん♪」
「こんなにヨガって何が優しくだ！
お前のマンコを俺のチンポの形に
矯正してやる！」
ずっずっずっずっずっず！
「ひゃっひあああああああん♪」

「おらぁさっきまでの
威勢はどうした!?」
パンパンパンパンパン!
「あ゛い゛い゛い゛いいいっ
もうおちんぽ凄すぎてらめぇぇぇ」
「もっとやらひくっ」
「やらしくだぁ!?この淫売め!お望み
どおりもっと激しくしてやらぁ!!」
ちゅばむっちゅばむばむっばむっ
「ひがっ、ひがぅうううううっ!!」
ずぼっずぼっずぼっ
「どうせ通りがかりの男捕まえて
片っ端からセックスしてんだろ!
このビッチが!」

「それはっあっくぅううん」
「くるまにのへてくれ、あぁっ、
たおれひに…」
やっぱりそこ等中の男と
やりまくってんじゃねぇか!
それなら
パンパンパンパンっ
「ひぃあああああ!?!??」
「おれのチンポの味しっかりと
覚えさせてやるよ!」
「う゛う゛っ、あっあっ
うぁあぁーーーっ!!?」
じゅばっじゅばっじゅばっじゅばっ
「おらったっぷりのめ…よ!!」
どびゅる!びびゅっびゅっ
「ひぃぃいいあああああああ!!?」

「ひゅーっかひゅーっ
ひゅーっひゅーっ」
「おーい生きてるか？」
「はっ、はっ、はひっ、ひっ…」
「何発目まで覚えてるよ？」
「じゅっひゅ、ひゅーっひゅーっ」
虚ろで声にならない返事が聞こえる。
「抜かずに何発もやったら
さすがに壊れるわな…」
…ぐったりして起き上がる気力も
失せた少女を見下ろし、考える。
このまま道に打ち捨てて事件に
巻き込まれるのも後味が悪いし…、
仕方ない。
「持って返るか」

「オッニーサン!」
背中から元気な声を
かけられ振り返る。

「オニーサン冒険者だよね!?
ニャハッ♪ ちょーとイイモノ、
仕入れたんだけど♪」

「イイモノ?」

「そ、冒険の役に立つすっごい武器!」
その辺の商人が仕入れる事が
できる強力な武器といったら…
クレイオスソードあたりか?

「こっちこっち!」
気がつけば行商人は路地裏の
手前でぴょんぴょんと飛び跳ね
ながらこちらに手を振っている。

丁度手持ちの武器が刃こぼれ
していたこともあり、
見るだけならと俺は
彼女についていった。

「ふ　ざ　け　ん　な」

大層な武器が収められていると
言う箱を6万Gで購入し、
中身を拝見した俺の第一声である。

顔は笑っているがこめかみに
ピキマークが入っていることは
言うまでもない。

金を受け取ってスタコラサッサと
逃げようとしていた行商人の
首根っこを「ぐわし!」っと
鷲づかみ、ひょいっと持ち上げた。

「ちょちょちょっと!
オニーサン!離してって!
ぁいたたたっ」

じたばたともがいている様が
摘み上げられた猫みたいで
不覚にもちょっと可愛いなどと
思ってしまったが、
そんなことは今はどうでもいい。

「料理用ナイフが6万って
こたーねーだろ!?」
耳元で大声で叫んでやったのに
驚いたのか、行商人はビクンと
跳ね上がる。

「ひぅぅ、ゴメンナサイーッ!
こっちも生活掛かってるんだよぅ
許してぇ…」
そして目に涙を蓄えながら、
クスンと鼻をすすり、
力なくうなだれた。

「ちょ、泣くなって!騙されたのは
俺なのに俺が悪者みたいじゃないか」
露骨に弱気になられたので
逆にこちらがたじろいでしまう。
俺には別に女子供を泣かして
喜ぶような趣味はないのだ。

「うぅうぅぅ…」
「あーもー、わかった!わかったから!
金に困ってるっていうし、
その金はくれてやる!」

「え!?」
行商人の顔が「ぱぁっ」と明るくなる。
背景にお花畑の幻想でも
見えてきそうな満面の笑み。

「が、かわりにお前を買う」
今度は目が◯になり、頭の上に
?マークを沢山浮かべている。
面白いくらい顔に出る奴だなー…。

「1発抜いて6万だ。破格だろ」

言いながら取り出した息子を
行商人の眼前につきつけ
さっさと握るようにアゴで促す。

「え…、えぇーっっ!?
お、オニーサン、アタシ
こーいうのはチョット…、
ほら、人に見つかっちゃうし…」
表の人通りを気にしているのかチラ
チラと視線をそちらにむけている。

「こんな路地裏誰も気にしねーよ。
ココは暗いからそもそも
向こうからこっちは見えねえ」

「で、でもでも…」
明らかにキョドっている。初めてか?

「したことないなら教えてやる。
お前くらいの顔と体なら
知識があれば全然稼げるだろ」
「ひゃんッ!」

息子を行商人の頬にこすりつける。
ぷにぷにと柔らかい感触が
亀頭に伝わりあっというまに
息子全体がピンといきり勃つ。

「お、オニーサン…、…ほんき?」

「ほら、これをしごきながら
先っちょを口に含むんだ」

「あうぅぅぅ、ホンットーに、
しなきゃダメなの…?」
「料理用ナイフ」
「はぅッ!うぅ〜、わかったよぅ。
だ、騙してゴメンナサイ〜…」

行商人は半泣きになりながら
俺の息子にしゃぶりついた。

路地裏少女のチャロちゃんを紹介するよ☆

名前：チャロ
散歩が好きで色々なところをうろうろしている。
知らない道を開拓していくのが好き。
そのために街の地理に人一倍詳しい。
よく道案内を頼まれるが、
彼女オリジナルの近道を教えることがあり
かえって危険な目に合ったり帰りに
迷ってしまう人が多い。
基本的には明るく人懐っこい性格。

年齢：18
血液型：O
身長：152
体重：36
スリーサイズ：B74-W58-H75
趣味：修行
イラスト：飴

「そこの道行くお兄さん」
頭上から声が掛かる。
どこか幼さを残す可愛い声。
声の主は、腰掛けていたフェンスの
てっぺんから、軽い身のこなしで
降り立った。
「さっきから地図とにらめっこ
してるけど、道にでも迷ってるの?」
ネコミミフードの少女(?)は
興味津々と感じで、くりくりっとした
青い目を向けてきた。
「やっぱり迷ってたんだ。
ちょっと地図見せてみてよ。」
地図を見せると、彼女は人懐っこく
ニコリと微笑んだ。
「お兄さんラッキーだね〜♪
この場所なら
僕が案内してあげるよ♪」

僕という一人称に若干戸惑いつつ
道案内を頼む。
そういえばお互い
自己紹介がまだだった。
「え？僕の名前？僕の名前は
チャロだよ。よろしくね、お兄さん♪」
よろしく、と握手をする。
ブカブカの袖から出てきた
チャロの小さい手は、紛れも
無く少女のそれだった。

「れっきとした女の子だよぉ！
失礼だなぁ！」

確かに、こんな可愛い子に対して
失礼だったかもしれない。

「へっ!? かっかか可愛い……?
お…お兄さん何? 何か企んでる?」
むしろ、チャロみたいな可愛い子が
突然声を掛けてきて道案内って方が、
色々と企んでるんじゃないかって
考えちゃうんだけど……。

「えへへっ♪
でも褒めてくれてありがと〜。」
チャロは顔を真っ赤にして
照れている。

「それじゃ出発進行〜♪
張り切って行くよぉ〜!」

路地裏。
「だーれだ?」
この声はチャロだ。
初めて会った日から数日経って
いるが、彼女の声だと確信できる。

「当ったり〜。
また会えたね、お兄さん♪」
こちらにしていた目隠しを解いて
ニコニコとした彼女が現れる。
初めて会った時と同じ
人懐っこい笑顔に心が暖かく
なるのを感じる。

「今日はこんな所でどうしたの?
お散歩かな? あ、もしかして
裏路地探索にハマっちゃった?」
「この前、初めてお兄さんと
会った時は、色々あって
面白かったもんね〜。」

確かに、ある意味では面白かったが…
正直、裏路地探索は懲り懲りだ。
「なんだ違うのか。ガッカリ。
裏路地仲間ができたのかと
思ったのにさ〜。」

今日裏路地にいるのは
チャロを探していたからだ。

実は、別れた次の日から
ずっと探していた。

「僕を探してた……? 何で?」
それは……。
チャロの事がどうしても
忘れられなくて――

「え、僕の事が……好きになった…?」
頷くと、笑顔のチャロが
飛びついてきた。

「嬉しい!」
とっさに飛びついてきたチャロの
身体を受け止める。

柔らかさと軽さに
ドキリとしていたら、
「ん〜ちゅっ!」

唇を奪われた。
「僕もお兄さんの事
気に入ってたんだ〜!」
イタズラっ子みたいな顔をして
キスをしたばかりの唇を
ぺろりと舐めるチャロ。

「だからさっき見つけた時
すごく嬉しくなって
今も胸がドキドキしてる!」

そう言うと
チャロはまたキスをしてきた。
柔らかな唇の感触に、
何も考えられなくなる。

「あはっ♪」
キスで心を奪った小悪魔は、
まさしく小悪魔みたいな笑顔で
次にこんな事を言った。

「お兄さん……僕の秘密、
知りたくない?」

ぱさりと開かれたパーカー。
「えへへ。僕、
実は下に何も着てないんだ。」

薄暗い路地裏に、チャロの肌色が
妖しく映える。
路地裏の湿った空気に
妖艶な色が染み出した。

「初めて会った時も
そうだったんだよ♪」
恍惚とした表情で語り始めるチャロ。

「だから裏道のフェンスを
超える時なんかは、お兄さんに
見られていないかどうか
すっごくドキドキしてたんだぁ。」

「最初に、女の子かどうかって
思ってたみたいな事言った時に
見せちゃおうかって、
ちょっと思ったんだけどね♪」
熱に浮かされた様に
チャロが告白を続ける。
彼女の興奮が、湿った空気を伝わって
俺に伝染してくる。

「ふふふっ……お兄さん
目が血走ってるよ?」

上気した顔。
首、鎖骨から肩に掛けてのライン。
肋骨が少し浮き出ている脇腹。

幼い体型ながらも
女性らしさを思わせるくびれ。
そして、彼女の興奮を証明するように
うっすらと汗を浮かべている全身。
気がつけば、チャロの身体を
舐める様に見つめていた。

「そんな情熱的に見られたら
僕ドキドキしてきちゃう……」
そう言いながら
チャロはコチラの手を取った。
初めて会った時にも触れた
チャロの手。少し汗ばんだ手の平。
あの時、チャロが女の子かどうかとか
言っていた自分が
馬鹿みたいに思えた。

「触ってみる?」
チャロがこちらの手を取り
両手の指でさすり、さすり。

「お兄さんの顔に書いてあるよ。
触りたい触りたいってさ……?」
手を弄びながら、チャロが淫靡な
笑顔を向けてくる。
人懐っこい笑顔とは違う女の顔に
完全にやられてしまう。

「お兄さんなら……イイよ」
もはや許可が無くとも
そうしていただろう。

チャロの胸にふれ、乳首に触り
軽くもみあげる。
少し小ぶりだが、チャロの
形の良い胸は手の平にスッポリと
収まり、手の平を逆に柔らかく
包み込んでいるかの様だ。

「んっ……お兄さんの手、大きい……。
判るでしょ？
僕、今すごくドキドキしてる。」

伝わってくる、チャロの早い鼓動。
路地裏での秘め事。
非日常の体験に、
頭がクラクラとしてくる。
「お兄さんも、同じみたいだね。
すごく興奮してるの、判るよ。」

皇女のミルちゃんを紹介するよ☆

名前：ミル
本当の名前はシュテラヴィア=
エルノーブル=アルティシア=
ミシェール=ヴァンシュタイン、
愛称『ミル』
未来から来た機械帝国の第6皇女でチビ。
滅びつつある祖国を救うため、
未来よりお供ロボを率い単身過去へと遡って
きたのだが、どうやら過去へ戻りすぎた様子。
しかし、持ち前の前向きさと無謀さで、
『無ければここから強い祖国をつくる』と、
建国へ向けて野心を滾らせる。
その為かは分からないが強い婿を探している。

年齢：18
血液型：B
身長：135
体重：40
スリーサイズ：B62-W48-H63
趣味：機械いじり
イラスト：ヨシタマ

『…わひゃあ
ああぁぁぁぁぁ―っっっ!!??』

どっすー――――んッ!!

…ったぁ〜…
っな、何であんな高い所に…
座標間違えたかなぁ…
う〜でも微調整してる暇なかったし
まあ、地中とかに出現しちゃう
よりはいいけど…
着地点がやわらかくて助かったかも。
……
…んっ…な、何か股が
生暖かいんだけど…

…———っ!!!???

っな、ななっ、なぁ〜っ?!

何してんのよこの変態男ぉ〜!!!!

ごすっ!!

わ、悪かったわ、ごめんってば。
で、でも事故とはいえ女の子の股下に
見知らぬ男がいたらこっちだって
パニックになるわよ！
不可抗力よ不可抗力!!

…え？私？ふふん♪
ごほんっ聞いて驚きなさいっ!!
私こそ西方最大の機械帝国第6皇女
シュテラヴィア=エルノーブル=
アルティシア=ミル=
ヴァンシュタイン!!

…え？知らない？そもそも
機械帝国なんて無い？
え!?うそ?!だって私、10年前に
時間跳躍したはずッ……

!!!!!!??

う、うそ…わ、私———
『1000年前』に跳んできてる?!!
うぐぐぐぐ、慌てて時間設定
しちゃったからこんなことに…
そうだ、戻りすぎたならまた
時間進めば———…
あああああッ!!装置が壊れてるッ?!
さっきオトモロボ投げつけたかｒ
———ご、ゴホン
…
…ええい、もぅ!!
落ち込んでいても仕方が無いっ
こーなったらアンタに装置壊した
責任取ってもらうわ!!

何よ不服?!アンタが私の股下に
いた事が全て悪いのよ!!
原始人の癖に往生際が悪いわよ!!
…え？『誰が原始人だ』って？
アンタに決まってるじゃない!!
私から見れば十分原始人よ！
剣だの盾だの鎧だのって
そんな原始的武器使ってる時点で
原始人よ！ハイ決定!!
と〜も〜か〜くッ!!
装置直るまでアンタにはしっかり
責任とってもらうからね!!

カチャカチャ…
カンカン…
ギギギ…
キッキッキッ…

…ん？何か用？
何してるって…
そりゃ見てのとおり―――
あ～ごめんごめん、原始人が
見てもよく判んないか。
言っても通じないかもだけど…
コイツの定期整備よ。
機械は繊細なんだから
チマチマ診てあげないと
壊れちゃうのよ。

…え？こないだ投げつけてたって…
う、うるさいなっ、あれはアンタが
悪いんだからしょうがないじゃない。
だからこうやって今日の分は
念入りにやってんのよ!!
装置も直さなきゃいけないし…っ!!

偉いって…
べ、別にこんなの普通よっ。
姉様たちだって自分で造ったものは
自分で診るべきだって言ってたし、
私もそう思うし…
う…だからそんな偉いとか
言うなってば…

ぽんっ)
ふえっ?!
な、なに、何よ?!

ナデナデナデ…)
あ…も、もうっ、原始人のくせに
子ども扱いするなんてっ…

ナデナデナデ…)
ん…

ナデナデナデ…)

ぅん…っふぅ…えへ…
ん…撫でられるの？――
うん、まぁ、ね。撫でられるは好き。
お父様にはよく撫でてもらったし…。

それに何ていうかその…
あ、アンタがちょっと
お父様に似てるから…
あ！ちょぉっっっとだけよ！

ちょっとだけ!!
調子乗んないでよね?!

ピタッ)
？？
ど、どうしたの？
なんか…目つきが怖いんだけど？
――――…ふぇ？
見えてる？何が？え？ちく…
……
……
…

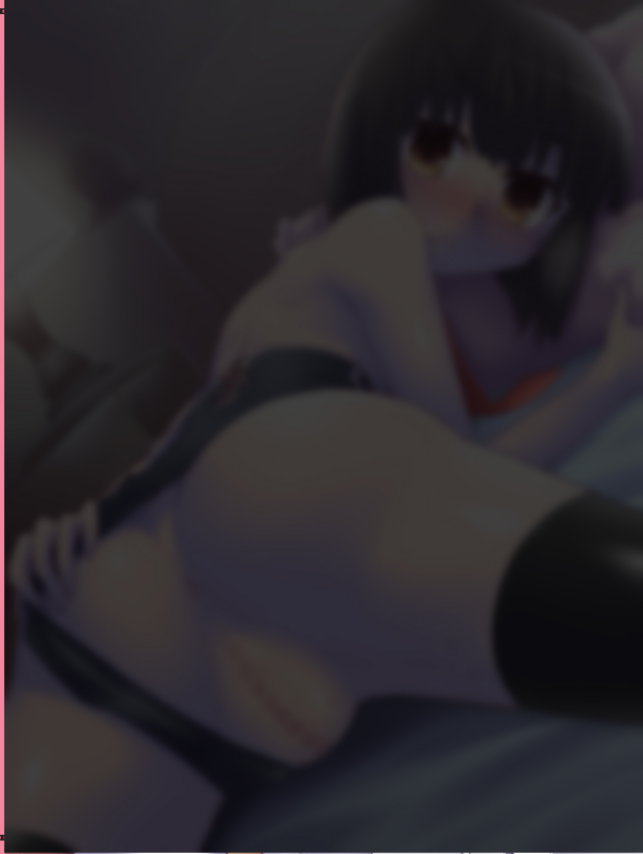
『――――っっっ!!!???!!!』

み、みるな
ドスケベええぇぇぇぇぇぇえええっ!!!!

ゴスゥッ!!!!)

―――この時代の材料や設備じゃ
装置は直せない…
つまり、私はもう
元の時代に戻れない…――。
…
……
だったら…
ここから、この時代から
私が!!強い祖国を作ればいいだけよ!!
とはいえ―――
私一人では不可能。

国を作ってもそれを
維持できなければ意味が無い。
子孫は繁栄させていかなければ。



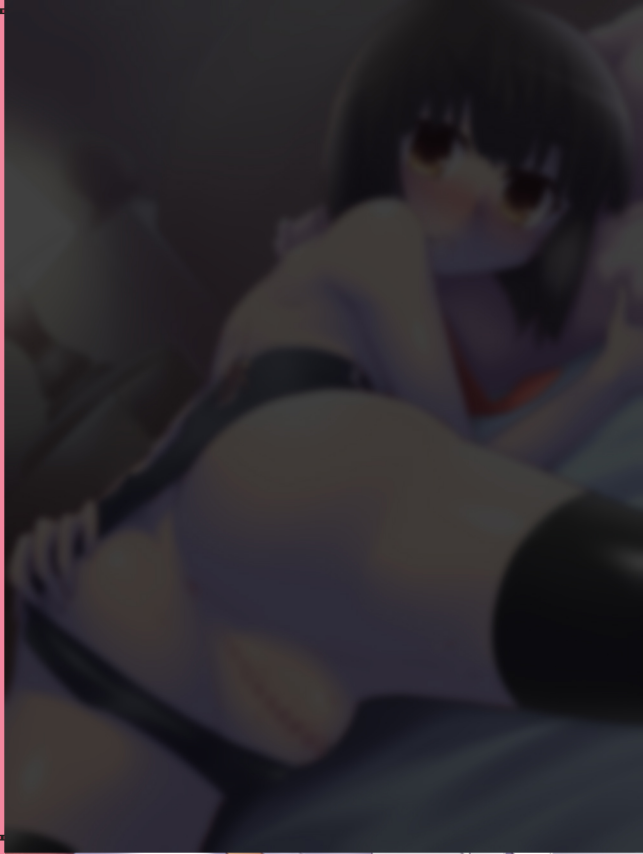
幸い…その、まあ、うん。
妥協できる男もいるし。
それなりに強そうだし。
ま、まあ、
そんな顔も悪くないし…

お、お父様に、ちょっと似てるし…

———…
そう、これは私の未来と祖国のため!!

そのために、あいつにも
役立ってもらおうってだけ———。

ただ利用するだけなんだから!!



…
……

…というわけなのよ!!
建国の父になれることを
光栄に思いなさい!!
だ、だからほら!!
さっさと挿入れる!!

…え？そのままじゃ
つらいだろうから下準備？

何をするのよ…――？

ピチャ…プチャ…
…ッひゃっ?!
そんなんトコ舐めちゃぁあっ…!!

ピチャ、チュルルッ…ジュパッ
あっ、はひっ、ひゃぅんっ…!!
も、もういいでしょ、早くしてよぉ

チュルルッ、ヂュプッ、ヌュプッ…
ふぁぅ、い、いじっ…
わる…ぅ…くふぅん!!

パヂュ、プヂュッ、プチュッ…!!
あっ、はうぁ、はぁぁぁぁっぐうっ!?
あ、はぁっはぁっ…
ば、ばかぁ〜…

グッ…
あっ?!

ズ…ズブ…ジュブルゥ…
んはっぁ…はっ、入って…くる…ッ!?
ハッ、太くてっ…か、硬くて…
はッ、熱ぃッ…の、がぁ!!

ズズブゥッ!!
くひんっ?!あ、あっ…奥まで、
届いてるぅっ…!!
ハァ、ハァ…う、は、早く、
動いてよぉっ…
ナカっ、むずむずする…

ズンッ、ズンッ、ズンッ、ズンッ…!!
あっ、はぅっ!!これっ…すごいぃっ!?
ナカこすれてるぅ!!
奥にっ先っちょが
ゴツゴツしてるぅっ!!

パンッ、パジュッ、ニュブンッ!!
はっ、はぁ!!かはっ!!らめっ…
そ、それ以上強くしたらぁッ!!

ビュブリュリュゥ――ッ!!!!

ひゃうううぅぅぅ…
っん!?
ハッはぐぅ…
私のっ――お腹の奥で熱いのが…
流れ込んできてる…
はぁっ、はぁっ…

こ、これがっ、精液？
これ、赤ちゃんの元…
これで赤ちゃん、できるかな…
はぁ…はぁ…
ねぇ、念のため、もう一回…
ナカに……――――

お菓子大好きスィーツトリオちゃんを紹介するよ☆

名前：スィーツトリオ
世界中のお菓子を手に入れようと
企んでいる悪い妖精さん三姉妹。

年齢：???
血液型：???
身長：???
体重：???
スリーサイズ：???
趣味：お菓子の食べ歩き
イラスト：名瀬

「みっ…、みーにこんなことして
許さないみっ…!」
以前戦闘で捕獲した
お菓子大好き妖精三姉妹。
彼女はその一番のお姉さん
キャンディスィーツ。

この悪戯妖精は困ったことに
俺の秘蔵の「飴玉チョップス」を
ちょくちょく盗んでいやがったのだ!

最近どうにも飴の減りが
激しいと思ったら!
ちょーっと可愛いからって
ペット代わりに飼っていた
妖精が原因だったとは!

パン!パン!

キャンディの尻に俺の付け根が
当たるたびに小気味の良い音がする。

キャンディ!
これは!お仕置きだからな!
パン!パン!

な〜にが
「人間、これの袋とってくれみ!」じゃ!
人の飴玉チョップス盗んどいて
盗人猛々しいわ!
包み紙くらい自分でとりなさい!
パン!パン!

「みっ!やめるみ!人間も一緒に
なめていいからもうやめるみ!!」

今ちょっと可愛げのある事
言われた気がするけど
もう止められない止まらない。

キャンディ!今度からは!
ちゃんと許可取ってから!
飴食べるんだぞ!

びゅっ!びゅびゅ〜っ!!

大人らしく説教をして、
俺はキャンディの中に怒りを
まき散らした。

厳しくお仕置きをしてやったから
これでもう勝手に飴玉チョップスが
消えることもないだろう!

が、妖精のアレは想像以上に
具合がよかったこともまた事実。

頭悪くてまたすぐに同じコト
繰り返して同じお仕置きさせて
くれないかなあ…等と思いつつ、
機会を見逃さないように
飴玉チョップスの数の管理を
しっかりしようと心に決める
俺であった。